



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2012.1.1発行 NO.22

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

巻頭言

一人で育てる子育てから、みんなで育てる子育てへ

今年度から、遠山洋一前委員長の後を引き継いで、研究企画委員会委員長になりました。前委員長は正に遠い山の太平洋一の方であり、私などはせいぜい近くの里山に登るのが精いっぱいです。しかし幸い、藤森平司さんが代表を引き受けてくださり、新進気鋭の福田泰雅さん（鳥取・赤碕保育園）、井出孝太郎さん（静岡・えじり保育園）が加わってくださったので、総合力で努めたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

さて、新システムの行方が心配ですが、「チルドレンファーストで考え、すべての子どもを対象にして、世界に誇れる保育制度を創り出す」という理念は大賛成です。けれども、実際は待機児童の解消問題が前面に出されて、さらなる企業参入が期待されたり、学校との接続をスムーズにさせたいということでしょうか、教育機能を全園に付加していくことへのこだわりが強く感じられます。

しかし、「教育」が優位？と説きながら、ではその「教育」とは何かの中身が少しも議論されず、法律の中に教育という言葉があるかないかだけで中身を判断しているとか思えない不毛の議論に、情けなさを感じるのは私だけでしょうか。質が問われているのにその中身が全然語られていないということです。

新年を迎えての話題としては恐縮ですが、昨年11月中旬にNHKが社会問題として取りあげた『インスタント・セックス』という番組は衝撃的でした。

寂しくて、耐えられない程の孤独感から、その場限りのセックスに束の間の安堵を求めている若者が、急増しているというのです。マネー経済が最優先され、競争のための合理化・効率化で個が分断序列化され、勝ち組と負け組に分けられる。そういう社会の中で、落ちこぼれないように、まわりから忘れられないようにと、誰かといつもつながっていたい私がついて、メールの着信を心待ちにしながら、必死でもがいています。

それなのに、生活を支える道具1つとっても、既に行きわたっている家族に1台では商売にはならずで、テレビでも電話でも“個具”を開発して、一人になることを奨励し、家族が向き合う装置さえなくなってきているのが今の社会なのだと思います。

こういう時代だから、当然子育ても孤立化してくる。隣近所の支えがなくなって、母親一人で担わなくてはならなくなってしまふ。だからこそ、子育ての社会化が叫ばれ、子育て支援が重要課題になってきたのは、みなさんご承知の通りです。

しかし、現代は複雑高次化した社会で、役割を専門ごとに分担しないとやっていけないようになってしまっています。そこに子育ても例外なくあって、子育てを専門家や専門機関（つまり私たち）に委ねて安心、委ねたほうがちゃんと育ててくれると、自分は素人になって引き下がることを当然と考える人が出てきました。誤解を恐れなければ、そこに私たちも、親は忙しくて保育園に預けるのだから、便利な保育サービスを用意して、引き取ってあげるのが良い保育だと考える。すると、子育て支援といいながら、利便性で誘う専門機関と、利便性に頼る親という関係を支えてしまうことになっているとしたら、そこに落とし穴があるように思うのです。

子どもを生みさえすれば、親は親になるというのは思い違いで、子どもとかかわることで親に育っていくのです。子どもの育ちに向き合いながら、親も育つのが子育てで、その関係を支えようとしたら、引き取って終わってしまう保育ではなく、親と子のかかわり合いを豊かにしていく保育を創り出さなければならないわけです。

全私保連広報部が「2011年中堅園長セミナー」での私の話を紹介してくれるようなので、話が重なることは避けたいのですが、認めてほしい私がついてもらえずに、存在感をなくした私がついていたいへんな

時代に生きている私たちだからこそ、一人ひとりが大事にされて（存在感）、一人ひとりがみんなの役に立っている実感（貢献感）が持てて、育つ手応えやみんなにしていることに幸せが見出せて（幸福感）、支え合い、学び合い、育ち合える関係（所属感・コミュニティ）を生活の身近などここに創り出していかないと、経済より前に人間が破綻してしまいそうです。

このような時代に、保育園はどんな役割を描き出したらよいのでしょうか？新システムという新たな枠組みが提案されていますが、本当はもっと大きな枠組み（イメージ・概念）の中で保育園という子育て文化を描き出さなければならない時代なのだと思います。

思いばかりが大きくなってしまいましたが、これは本研究機構が考えて、こうしようとみなさんに提案することではありません。一緒にみんなで考えていくということです。

研究機構研究企画委員会では、新年度に向けて機構のミッション（役割・使命）を可視化（みんなにわりやすく）する作業に今取り組んでいます。そして、そのミッションの中から、研究企画委員会の具体的なアクションを鮮明化していこうと考えています。その中で、あれもこれもと欲張らずに、まずは着実な一歩からと考えたのは「園内研修」でした。時間がとれないで終わらせられない課題です。

園内研修では、大豆生田先生のチームに『保育の質を高めるための体制と研修に関する研究』を2010年8月にまとめてもらい、報告書としてお届けしましたが、それをもう少し進められないかということです。そこで研究企画委員会の中にプロジェクトチームをつくり、園内研修のためのワークシート（A4判・12頁位）を年に3回程度発行できたらと考えました。シートの前段で、みなさんと一緒に考えたい課題を、いくつかの視点を紹介しながら話題提供し、それをたたき台にして園内で討議してもらおうというものです。

そしてもう1つ、保育実践の保育の質の中身の検証と社会知（社会化）の理論化に向けて準備や予備調査を行うパイロットチームをつくることとしました。

一人で育てる子育てから、みんなで育てる子育てへ。子どもが育つことの喜びと、親は育てることの手応えと自らも育つ充実感を、もちろん保育者もそこで育ててもらって、みんなが育つ、みんなで育ち合う豊かな関係がどうしたら創り出せるのかを、みんなが考え、トライして、その実践交流を通して社会化していけたら、それがみんなの力になれると思います。

人間が人間として育ちづらい時代だからこそ、明日への希望を諦めずに、みんなが自分の課題としてとらえ、チャレンジに参加していけたらと思います。

（鈴木眞廣●千葉・和光保育園園長）

提言

求められる能力と保育 …世界を変える力の基礎としての保育

■「問題解決の能力」を個人の問題としてとらえることの問題

私たちが保育をするとき、子どもたちの育ちについて何を手がかりとして判断しているのでしょうか？おそらく「何かができるようになった」など、目に見えやすい成果としての「結果」からではないでしょうか。

確かに、何かができるようになることは大切なことです。しかし同時にそれは、その子やみんなにとって将来起こると予想される問題を解決できる力のことなのでしょいか。

そう考えると、現代社会が子どもたちの中に求めている「問題解決の能力」は、有名な大学を卒業し、有名な企業に就職するなど、とても個人的で狭い範囲内の問題解決に終始しているように思えてなりません。

つまり、今の大人では抱えきれないほど存在する世界の中の大問題を解決する力を育てようとしているようには思えないのです。

■条件反射は学力？

この個人的な問題は、知識の量と速さと正確さによって測定されています。これらを学力として考えて、人より一層早く答えることが求められ、「じっくり、ゆっくり、みんなで考える」という人間本来の問題解決の仕方を放棄させています。一人ひとりを分断し、いわゆる競争主義の中に放り込むわけです。

しかし、それら知識の量、速さ、正確さについては、それが得意なコンピュータに任せましょうというのが、先進諸国の考え方になっています。むしろ、人間にし

かできないこと、

- 1 問題を認識し、分析する能力
- 2 問題解決のための推論や仮定する能力
- 3 問題解決に必要な情報を見つけ、取り出す技術
- 4 情報を分析する能力
- 5 情報を組み合わせ、仲間とともに答えを創造する能力

などを学力として求めています。そして、それらを実践するために基本的な生活、円滑な人間関係の構築、創造性など、さまざまな基礎的能力が必要で、乳幼児期の充実した遊びによって育まれると認識しています。

■真の問題解決とは

単純にお金を儲けたいという個人的な問題も、政治、経済、紛争、人権、貧困、環境、科学、教育、医療、福祉など、文化的・歴史的・世界的な規模の問題とすべて関係しています。また、それらの状況は、毎日めまぐるしく変化しています。そして次々と現れる問題は、嫌々やらされて出来合いの問題が解けても、複雑化した将来の問題解決を保障するものではありません。ですから、むしろ解決が困難な問題に直面したとき、それらの問題を解決することを心から楽しめる人として育つほうが重要ではないでしょうか。

そして問題は、身近な問題から世界的規模の問題まで、多種多様に存在し、その多くは個人的な問題ではなく、社会全体に関するみんなの問題として存在しています。そうならば、みんなの問題は、みんなで解決できることが大切です。

そのためには、主体的に生活を楽しみ、その中で問題に出会い、生活の中で解決し、次の生活へつなげていく、そのような生活を日々送ることが重要です。

倉橋惣三が「生活を、生活で、生活へ」と語ったわが国の保育は、いつの間にか子どもの願いを押しつけ、大人の意のままに操ることを意味するようになりました。意のままに操って子どもに何かができるようにすることも、子どもに何も手出ししないことも、大人の一方的な計らいであることに違いはありません。

それよりも同時代を生きる人として、子どもと一緒に同じものを見、同じように考え、モノゴトの多様な側面を知り、語り合う積み重ねが、社会や自分自身の問題を解決する力を育てているのです。学力は知識だけが独り歩きしてはならないと思います。

■順序が逆になっている

生活の中で出会うモノゴトについて、問題解決も含めたさまざまな能力を育むために、安全、安心、清潔で、遊びを触発し想像力をかきたてる文化的で基本的な環境が存在し、子どもがやりたいことができ、子どもの働きかけに対応する保育者の存在が欠かせません。

ところが、今はこれらの順序が逆になり、保育者の計らいばかりが尊重された保育によって、子どもを育てようとしています。そして、年齢的な特徴である目安を乗り越えるべきハードルとして勘違いし、それを越えさせようと躍起になっています。その保育者の働きかけに子どもが応じることができないと、単純に経験不足であったとしても、気になる子として他の子どもから分離されてしまいます。

■遊びで生きる力の基礎を育む

大人の働きかけを優先しなくても、子どもは外へ向けて働きかけ、自ら学ぶ素晴らしい力をはじめから備えています。例えば、赤ちゃんは、泣くと世話をしてくれる人が現れ、何かしら解決してくれることなどを通じて、次第に意図的に泣いて要求を表現します。そしてそれらは、次第と複雑化し、物を動かす、叩く、蹴飛ばす、つまむ、投げるなどの行為や、話す、音を出す、歌を歌う、絵を描く、踊るなどを通じ、遊びの中で経験が経験を生むように、さまざまな表現をして外に働きかけます。

子どもたちは、このように外に働きかけ、感覚を働かせて感じ取り、論理的に考え、自分の中に積み重ね、智慧として構築します。外への働きかけは「やりたいことをする」ということです。子どもがやりたいことを充分にし、その中で自ら学ぶ生活を送っていると、年齢的な目安など軽々と越えていきます。要は、目的を同じくする仲間と一緒に、遊びを広げ、深め、紡ぎ、とことん遊び込むことが大切なのです。

保育者には、一人ひとりの子どもがその子らしさを発揮すること、さまざまな価値観を育てている家庭や地域の中の専門家を含む多くの資源を共有し、じっくり、ゆっくり、丁寧に、人間らしくモノゴトについて考え、子どもたちと楽しく保育を創り出すことこそが求められます。

(福田泰雅●鳥取・赤碕保育園園長)

認定こども園から見た「幼稚園」

本園は幼稚園型認定こども園から幼保連携型に移行(2010年)した園です。以前から幼保の枠にとらわれない保育施設をつくり、0歳～5歳までの子どもにかかわりたい、親が子育てを楽しみと感じ、自信を得て仲間をつくり、地域が元気になる子育て支援を目指したいと考えていたので、質の高い保育を目指しながら「総合施設」機能の充実を図るために、認定こども園という制度に参画しました。とくに、幼保連携型に移行した先にはまったく新たな世界が広がっているのを感じました。その新たな世界から幼稚園を振り返り、そこから見えてきたものを私が感じている「幼稚園」のイメージと個人的な経験を基に述べることにします。

◆「建学の精神」が個性的過ぎると…

昨今話題になる「建学の精神」ですが、一番問題なのは、目指す保育にどれだけ客観性が含まれているのかということだと思います。すなわち、「建学の精神」の名の下に幼稚園教育要領が見失われてしまっただけの問題だということです。幼稚園だけの現象ではないのかもしれませんが、私学の独自性が一歩間違えると独り善がりな自己満足になってしまうと危惧しています。自身にいい聞かせているのですが、独自の取り組みの中にも子どもの発達に関する視点など普遍的な根拠があり、目指している豊かな内容がきちんと公開され、説明責任が果たされていることが大切だと考えます。

◆なぜ、「すべて」がつかない「子どもの最善の利益」なのか

以前私は、自園に入園している子どもとその家族のみを相手にしていました。さらにいうならば、「わが園の保育を受けさせたいなら入園させなさい」という、かなり驕った感覚を持っていたということに気づきました。現在日本は、かなり深刻な格差社会になってしまいました。今さらいうまでもないことですが、「わが家だけの幸せ」はあり得ないということです。自園に入園している子どもとその家族しか考えないというのでは、世の中良くなりません。地域の“すべて”の子どもを幸せを願う園でありたいと今は考えています。

◆行政との協働のあり方に不慣れなため、地域の拠点となりにくい

認定こども園となって幼保連携型に移行し、地元の

佐野市といろんなかわりが生まれました。市と幼稚園連合会とで保育所制度の“勉強会”なども行うようになりました。さらに、認定こども園の必須事業である子育て支援についても「地域子育て支援拠点事業」に参画することにより、より充実した内容を目指せるようになりました。何よりも、地域の“在宅子育て家庭”の親子にもかかわれるようになりました。幼稚園は許認可が都道府県なので、市区町村との関係づくりには不慣れだと感じました。ここをどう克服するかが、これまでの私立幼稚園の実績を今後にかすための大きな課題になると考えます。

◆保育は何のために・誰のためにあるのか

私はこれからも地域の方たちと、より豊かで深みのある保育を目指していきたいと願っています。もちろんその保育は、子どもの発達に沿った『遊び』により構成されるものです。そしてその保育により、今日の少子化が進行した社会に貢献していくべきだと考えます。そのような街づくりの視点を持たなければ、いくら理想の保育を追求しても、独り善がりな保育になってしまうのではないのでしょうか。

(中山昌樹●栃木・認定こども園あかみ幼稚園園長)

編集後記

◎「制度改革」と「保育を深める風土」の一体化をめざして

福田委員が訴える「問題解決力」に言及すれば、従来型の保育ではこの力は育めない！それはさまざまな社会問題を為政者(国民自身)が優柔不断で決断しきれない日本の現状を見れば明らかで、我々が受けてきた保育・教育の賜物(?)。研究企画委員会、幼保合同会議でも「子ども主体の保育の普及」が共有課題ですが、問題解決力の発揮が及ばない状況が続きました。が、鈴木委員長の“所信表明”や中山園長の率直な文章は問題解決に向けた連帯の呼びかけです。問題解決力はリーダーシップと連帯力がシンクロして機能します。保幼小が真の子ども理解に挑み、役割分担について語り合う連帯の風土づくりが一義的でしょう。制度論に偏重した新システム議論では子どもの育ちが保障されないだけでなく、園経営においても守るべきものも守れなくなる、そんな危惧を実感しています。(片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長)

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp